

考察：仮面の持つ機能的意義の変化

A study on TRANSITION: Determinants Influencing the MASK Transformation

岡田 裕之

Okada Hiroyuki

文化マネジメントコース

「そのとき、仮面はもはや踊り手の『仮の顔』ではなくなる。そこにあるのは、死者の顔、精霊の顔にはかならない。」

里文出版社『仮面 そのパワーとメッセージ』より抜粋

完全な仮面・仮面の完全

古来、仮面はそれを身につけた者に、神や妖精、死者などを乗り移らせることを目的としていた。世界各地に残る、祈祷・祈願・死者と生者が交歓する儀式のために仮面は用いられた。人々がそうした自分たちには手の届かない高位に位置する存在を信じており、そしてまた仮面が彼らをこの世に呼び出すための道具であると信じていた。そうした深い仮面信仰の上に仮面という道具は在り、仮面を付けることは、自らの存在そのものが、呼び出すものに置き換わることであり、それが仮面による「変身」であった。このとき仮面は、それ単体が「変身」という機能を有している。少なくとも仮面を扱う人々が、そうした仮面信仰を失わない限り、仮面は、その一枚で神秘的ともいえる「変身」の力を有した道具であり続けるのだ。



しかし現代において、「人々」である私たちは普通そういった仮面への信仰を抱いてはいない。それどころか、科学技術の進歩は多くの恩恵と引き換えに、「人々」の信じるものを顕微鏡の奥か、天体望遠鏡の果てに観測できるものに限定してしまった。

結果、私たちという「人々」は、「あやふや」な存在を信じることをやめ、その信仰の上に成り立つ仮面もまた、顔を隠す一枚の板きれへとその存在を変えた。

仮面への信仰が失われると同時に、仮面もまた「変身」という力を単体で保持することが不可能になった。ここに仮面は、既に「変身」が欠落した不完全な道具へと変わってしまっているのである。

不完全な仮面・不完全の補完

たとえ、仮面への信仰が失われようとも今日まで仮面が変身の道具として残っていることは周知である。

さて、それではあなたの知る仮面とはなんだろう。

ヴェネツィアのカーニバルにおける煌びやかな仮面、能面などにあるおぞましいほどの狂気に満ちた幽鬼の面、身近なところでは夏祭りの縁日に並んだ種々の「お面」もまた仮面である。

だがしかし、現代における仮面は、古い時代のそれとは確実に異なる点がある。それが「変身」という本来仮面の持っていた機能なのである。すでに仮面の変身の機能は失われている。けれども私たちは仮面をつけることに、その仮面にかたどられたものへと変身することを期待する。

「変身」という機能が失われてしまった仮面を、しかしまた「変身」するための道具として使おうとすること。それ自体はとても歪なことだ。しかしよくよく考えてみれば、私たちは、仮面にて変身する場面を少なくとも幾度かは目撃しているはずである。それは演劇の世界に。それは文芸の世界に。または地域にのこる風習の中に。

私たちは、仮面にかたどられるようなあやふやな存在を信じているわけではない、また仮面が変身できる道具であるなどと信じてはいない。だから、そうした信仰の喪失によって失われた機能を今度は自分たちの認識を変えることで仮面の機能を補完し、変身を成立させるようになったのだ。

約束事

仮面信仰がなくなった現代においても、仮面は変身する道具として生き続けている。その要因としては、人々が仮面を現実に即してより単なる道具として扱おうとするようになったことが挙げられるだろう。

例えば私たちが劇を観ることに、その作品に感情移入していくことで、目の前の役者を登場人物として捉え、認識し始めることがあるだろう。それは私たちの「ものの見方」に由来する。そしてまた仮面に対しても同じことが言える。

節分の行事として豆撒きを行うことに、鬼の面を付けた父親を鬼として見立てて豆を投げ付けることがあるだろう。中世から近世において貴族の間で人気を博したとされる仮面舞踏会もまた、厳密にはお互いの素性を知りつつも、それをあえて認識を変えることで遊びとして興じるものであった。



仮面の信仰が失われて以来の、仮面における「変身」とは常にこうして仮面の変身が支持される特定の空間内で限定的に発生するものであった。ただし、この空間には真に仮面を信仰している者は必要ない。ただ前提として、「仮面は変身するもので、それを付けたものは変身したとして扱おう」という理解が成り立っていればいい。

そういった約束事が共有される、半ば劇場化した空間で、仮面はその失われた機能を取り戻す。

人々の中で生きる現代の仮面とその意義

仮面が用いられる事象において、約束事は本来仮面を付けるだけでは変身したとして扱われなくなった仮面と、その仮面を付ける者を、変身させるべくして働きかける。仮面への信仰があった場合とは違い、人の思想ではなく明確な意思に基づいて、ある意味では信仰の喪失とともに失われてしまったその仮面の機能を、それを取り巻く人々とで見かけ上であるにせよ蘇らせてみせたのだ。



「仮面」が変身の機能を失おうとも、本質的には「信じられていない」ものにも作用することのできる「約束事」というシステムはそれに関係なく「変身」を許容することができた。

「仮面が信じられていない時代」において仮面を付けること自体には「変身」の機能があるわけではない。それが周囲に観察され、またある一定の約束事をもって仮面による「変身」が行われたという認識が共有されることで初めて仮面は本来の完全な機能を取り戻すのである。よって仮面の意義とは、造形などの美術的なものを除いては観察者の存在なくして語ることはできない。仮面による「変身」について言及するならばそれを見る人々の間で共有される約束事なしには語ることはできない。

現代の仮面は人に観られることによって初めて完全となるのである。

【主要参考文献】

- 佐原真監修・勝又洋子編『仮面 そのパワーとメッセージ』里文出版、2002
- 佐藤泰正『文学における仮面』笠間書院、1993
- 吉田憲司『仮面は生きている』岩波書店、1994
- 和辻哲郎『偶像再興 面とベルソナ』講談社、2007